

# 陳允陸の世界

## ～中国の現代作家紹介～

塩田昌弘

### The Art of Chen Yunlu's Painting

SHIOTA Masahiro

#### 序

中国絵画には、深遠な伝統が貫流している。時折、伝統を研究し尽した画家が、日本画や西洋画と遭遇して、新鮮な境地の中国絵画を発表する事がある。即ち、現代中国画の創生である。元来、中国画には、写意と工筆による二つの筆触の概念があり、それが水墨や重彩にいろどられて、一幅の風格ある絵画が生成されるのである。

ところで、日本に留学し、日本画を研究した中国の著名な画家といえば、傅抱石 (Fu Baoshi, 1904～1965)、張大千 (Zhang Daqian, 1899～1983)、張善孖 (Zhang Shanzi, 1882～1940)、高劍父 (Gao Jianfu, 1879～1951)、高奇峯 (Gao Qifeng, 1889～1933)、陳樹人 (Chen Shuren, 1883～1948)、李庚 (Li Geng, 1950～)、賈又福 (Jia Youfu, 1942～)、陳允陸 (Chen Yunlu, 1959～)などを列举できよう。

本稿では、1989年に来日して以来、関西学院大学大学院で日本美術を研究し、現在、日中文化芸術の交流のため、独自の水墨画の領域を開拓している陳允陸 (Chen Yunlu, 1959～、ちん いんりく) をとりあげ、その新鮮な水墨表現の世界の意味するところを明らかにしたい。

#### I. 陳允陸作家略史<sup>2)</sup>

1959年 江蘇省に生まれる。

1984年 南京師範大学美術学部を卒業する。

1985年 中国国際青年美術展に於いて、優秀賞を受賞する。

1986年 中国環境美術展で優秀賞を受賞する。また、全国教師美術展で優秀賞を受賞する。

- 1987年 全国牡丹書画展で一等賞を受賞する。
- 1988年 中国神龍書画大展に於いて、金賞を受賞する。
- 1989年 美術研究のため来日。  
日本書画交流展（東京）に出品する。
- 1991年 中国現代美術家20人展（香港）に出品する。  
『中国当代美術家人名録』に収録される。  
神戸大学教育学部美術専攻研究生となる。
- 1992年 関西学院大学大学院文学研究科美学専攻科に入学する。  
「陳允陸画展」大阪国際ホテルにて開催する。
- 1993年 第20回青峰美術院展に於いて奨励賞を受賞する。  
「陳允陸水墨画展」大阪船場クラブにて開催する。
- 1994年 関西学院大学大学院文学研究科美学専攻、修士学位を取得する。
- 1995年 中国水墨画家「陳允陸作品展」長野東急百貨店にて開催する。  
『日本水墨画年鑑』に収録される。
- 1996年 「陳允陸水墨画展」を荘園画廊（池田市）にて開催する。  
日本全国水墨画秀作展で新聞賞を受賞する。  
『日本美術名典』に収録される。
- 1997年 関西学院大学大学院文学研究科美学専攻博士課程単位取得する。  
全関西行動展（大阪、京都）に招待出品する。  
日本全国水墨画秀作展で出版賞を受賞する。
- 1998年 「陳允陸水墨画展」を心齋橋フジギャラリー（大阪市）にて開催する。
- 1999年 日本全国水墨画秀作展で無鑑査となる。  
「陳允陸墨彩画展」を荘園画廊（池田市）にて開催する。  
「陳允陸水墨画展」を心齋橋フジギャラリー（大阪市）にて開催する。
- 2000年 台湾国際書画展に招待される。  
日中水墨画研究交流展 埼玉県知事賞を受賞する。  
「陳允陸墨彩画展」を神戸そごう（神戸市）にて開催する。  
関西学院大学講師に就任する。  
上海人民出版社から『陳允陸画集』を出版する。  
（現住所 京都府長岡京市今里三ノ坪7-2-105 現在、日中書画芸術交流会会長、中国美術師範教育協会理事、中国美術家協会分会員、NHK大阪文化センター・サンケイリビングの水墨画講師、関西学院大学講師、酔墨会主宰）

## II. 作風（芸術の精神）について

中国絵画を論じた理論書は枚挙にいとまがない。張彦遠（Zhang Yanyuan）の『歴代名画記』、石濤（Shitao）の『画語録』、謝赫（Xie He）の『古画品録』、董其昌（Dong Qichang）の『画禅室随筆』、郭熙（Guo Xi）の『林泉高致』等著名な書物がある<sup>3)</sup>。陳允陸（Chen Yunlu、1959～）の風景画―描かれた自然は、それら伝統的な中国山水画論に立脚し、さらに、一步押し進め、陳允陸の風景画の世界を構築して見せている。

陳の風景画の理解のためには、山水画について論じた名著、『林泉高致』の「山水訓」の内容を知ることが必要であろう。温故知新なるがゆえである。

花を画くを学ぶ者は、一株の花を以て深坑の中に置き、その上に臨んでこれを瞰れば、すなわち花の四面を得ん。竹を画くを学ぶ者は、一枝の竹を取り、月夜に因つてその影を素壁の上に照らさば、すなわち竹の真形出でん。山水を画くを学ぶ者、何を以てかこれに異ならんや。蓋し身、山川に即いてこれを取らば、すなわち山水の意度見はる。（～中略～）

春山は烟雲連綿として、人欣欣たり。夏山は嘉木繁陰して、人坦坦たり。秋山は明浄揺落して、人肅肅たり。冬山は昏霾翳塞して、人寂寂たり。この画を看て、人をしてこの意を生ぜしむること、真にこの山中にあるがごとし、これ画の景外の意なり。青烟の白道を見ては行かんことを思ひ、平川の落照を見ては望まんことを思ひ、幽人山客を見ては居んことを思ひ、巖扁泉石を見ては遊ばんことを思ふ、この画を看て、人をしてこの心を起さしむること、將に真にその処に即かんとするがごとし、これ画の意外の妙なり。（傍線は筆者）

陳允陸の風景画（山水画）は、それを見る者にしみじみとした或る種の情感を抱かせる。その絵画は清らかに澄み渡り、透徹した大気の流れすら感じさせるのである。写意（Xieyi）と工筆（Gongbi）の境界領域をたゆたい、自然の恵みや社会への感謝の心を、鮮やかな黄色で表現する一方、自然の峻厳さや人生の儂なさを、深い青緑色で表現してみせている。陳は西洋の後期印象派の画家、フィンセント・ファン・ゴッホ（Vincent van Gogh、1853～1890）を尊敬しているが、ゴッホの『夜のカフェ』（Terrasse de café, le soir、1888年）、『星月夜』（Nuit étoilée、1889年）、『アルルのはね橋』（Pont de Langlois、1888年）などに見られる色彩、即ち、レモン・イエローとマリン・ブルーを多用している。また、東山魁夷（1908～1999）の青の世界と共通する静謐さを作品に秘めている。画家の感情が美事に色彩表現されているのを知る。また、富岡鉄斎（1837～1924）や村上華岳（1888～1939）らの日本画家からも多くの示唆を受けた陳は、東洋画の線というものについて再考しはじめている。村上華岳は彼の名著『畫論』の中で、東洋画の線について次の様に述懐している<sup>4)</sup>。

藝術家といふ者無駄なことが嫌ひなんです。一つの畫面に不用なものは置かない。何處を針で押しでもしゃんとして居る。ぴんとしてゐる。生きてゐる。此處から一寸程こちらに來ましても、一寸程上に上っても、それは必然の結果さういふものが出來て來なければ立派な繪とは申せない。本當の名畫はさういふ意味になつてゐる。其の線といふのは曩にも申しましたやうに、動と靜を持つて

る。動であって静である。静であって動であります。例へば山に入って行きまして、山が餘りしんと静かであるよりも、ぴつと鳥が鳴いて、一本の線を引きますれば、其の静かさが一層静かで山の景色が動いてゐる。鳥が飛ぶといふことは一つの静です。山があつて鳥が動くといふところに初めて山の全面が生きて来る。斯ういふ風です。誠に説明は難しいのでありますが、線といふものはさういふ風でありまして、字をそれで説明しましても宜うございます。踊りを説明しましても、又茶道なんかの説明にしましても、船の通る道、踊りでも、何でもさういふ一つの秘密な極意であります。道元禪師の歌で…ちょっと今忘れましたが、或る日に山の静かな池を御覧になって、鷗が一鴛鴦を鷗といふ—其の時片方が非線の線を通して調和して泳いで居るといふ意味であります。又禪語の中でも暗示を受けることが随分ある。參同契といふやうなものもそれは皆線の説明と申しても少しも差支へないと考へるのであります。要するに、線といふものは一つの悟りなんでありまして、調和した…調和といふものは動と静といふものを一つにくるめたものが調和であります。若し静ばかりであつたらもう死んでしまつて居る。動ばかりであつたら法則に外れてしまつてゐる。そこで其の二つがぴたつと混合でなくして化合してしまつたものが繪なんであります。(傍線は筆者)

この様な、東洋の繪画、就中、日本画を研究する陳は、書画一致論 (shuhua yizhi-lun)、詩書画三絶 (shishuhua sanjue) 等の中国繪画の傳統を踏襲し、更に、「万巻の書を読み、万里の道を行く」文人画家・富岡鉄斎、及び、線の行者と異名をとる日本画家・村上華岳の藝術の精神に触れ、伝統的な線に独自の技術を加え現代的な中国画を創成しはじめてゐる。

陳は、また、雪舟等揚 (1420～1506) の研究を開始し、その成果は、関西学院大学大学院で「宋元水墨画様式の日本化—雪舟の山水画をめぐって—」により修士号を得ることになった<sup>5)</sup>。その要点は、雪舟が宋元的水墨画を学び、その後日本化していった“雪舟の山水画”の成立に至る経緯を、作家の立場から、技法的なことを含めて詳細に論考した労作となっている。陳は論文の中で、山水画の画法、山水画の景物と空間表現、山水画の觀念と自然觀について、等を明確に分析している。そして、雪舟描く「天之橋立図」に代表される水墨画が、宋元水墨画様式から解放され、日本の風土と自然にあつた、日本化された水墨画となった美学的な経緯を解析して論じている。一体、雪舟の日本の美意識はどの様にして形成されていったのであろうか<sup>6)</sup>。

松尾芭蕉 (1644～1694) は、『笈の小文』の中でその問いに示唆を与えるかのような意義深い文を寄せている<sup>7)</sup>。

しばらく身を立む事をねがへども、これが爲にさへられ、暫ク學で愚を曉ン事をおもへども、是が爲に破られ、つゝに無能無藝にして、只此一筋に繋る。

西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、利休が茶における、其貫道する物は一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る處、花にあらずといふ事なし、おもふ所、月にあらずといふ事なし。像花にあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獸に類ス。夷狄を出、鳥獸を離れて、造化にしたがひ造化にかへれとなり。神無月の初、空定めなきけしき、身は風葉の行末なき心地して、

旅人と我名よばれん初しぐれ

(傍線は筆者)

西行(1118～1190)の和歌、飯尾宗祇(1421～1502)の連歌、雪舟(1420～1506)の絵画、千利休(1522～1591)の茶に共通するものは一つであり、それは即ち風雅というものである、と結論づけている。この風雅というものは、月や花に代表される自然美が人間の情感にふれた時、風雅の美が姿を表わすという。即ち、芸術は天地自然の美から生まれ出るものであり、人もまた自然の存在であるという。

この事に関連して、矢代幸雄(1890～1975)は、『日本美術の特質』の中で次の様に記している<sup>8)</sup>。

わが国に最も流行したる白楽天の「雪月花時最思友」の詩句を典拠としたと言われるが、自然が最も華麗に飾られた時、胸中に愛変の心を起す、というこの詩句の感傷主義は、日本人の情感に附いて離れぬものであった。されば雪月花という自然美の極致は深く人情味と混合して日本の詩歌を風靡し、絵画に多くの影を宿したことは、無理もない。

この様に、雪月花という自然美の形象は、日本画のモチーフとして流行していったのである。しかし、元来、この語句の出典は、中国の白楽天(Baile tian、772～846、白居易 Bai Juyi)の「殷協律に寄す」である<sup>9)</sup>。この事は、つまり、中国人の自然に対する美意識それは雪、月、花に象徴されているのであるが、いつしかそれも日本化されていったという事である。

五歳 優遊して 同に日を過ごし  
一朝 消散して 浮雲に似たり  
琴詩酒の伴 皆 我を抛ち  
雪月花の時 最も 君を憶う  
幾度か 鶏を聴いて 白日を歌い  
亦會て 馬に騎りて 紅裙を詠ず  
呉娘の暮雨 蕭蕭の曲  
江南に別れてより 更に聞かず

(五年の間、君とはゆるゆるとともに暮らしたが、ある日、行方定めぬ浮雲のように別れてしまった。そのため、琴・詩・酒を楽しむよき伴侶が、一挙に私を捨てていったので、雪・月・花の時節になると、とりわけ君のことを思い出す。昔、いくどか朝の鶏の声を聴けとうながし、白日の歌をうたい、またかって馬に乗るのは(だれなのか)と、紅いスカートの詩をうたったものだ。あのころ、呉娘のうたった、暮雨蕭蕭の曲は、江南で別れてから、全然聞いたことがない。) (傍線は筆者)

芭蕉、西行、宗祇、雪舟そして陳も、芸術の道の探求のため、その人生を漂泊の旅と化し流転の人生を送っている。そして、漂泊の旅人のみが到達しうる一つの道の涯に、やがて、自己の芸術を創りあげる日も近いことであろう。

人は、雪景色の美しさ、月光の夜景の神秘的な美しさ、四季折り折りの草花の可憐さなど、美の感動が人の魂を揺振ることを知るのである。即ち、「雪月花」とは、自然（人間の感情をも含めて）の美を具現する伝統的な言葉となって今に至っているのである。自然と一体になり切る時、人は美なる或るものを体験することができるのである。元来、中国の山川草木と日本のそれとは大いに違っている。中国の自然は、日本に比べて、寒暑が厳しく、高く険しい山々が多く、川も大海の如く廣大無辺に流れている。総じて、穏やかで美しい日本の風土や、四季を通じて変化のある風光とは、微妙な違いが感じられるのである。厳しい自然、ドラマチックに屹立する山々の形式は、雪舟の自己表現にむかなかつたが、雪舟は苦心を重ね、ついには、雪舟自身の世界を造りあげたのであった。陳の風景画は雪舟と逆の方向を辿りながら、日本的な雪月花のモチーフを表現するに到っている。その彩墨画の世界は、厳しさを透過した者のみが持つ静かな慈愛の精神に満ちており、その絵画を見る者すべてに、浄らかな親しみのある時空間へと招待してくれるのである。

ところで、陳の風景画には、中国的な、厳しい光景を描いたものも平行して描かれている。雪山や雲海の景色である。それらは、例えば、蘇州の運河の生活情景や奈良公園の鹿を描きたいわゆる“日本化された”温和な山水画とは異次元の空間を提示している。この中国的厳しさの表現と日本的やさしさとの融合の領域が醸し出す絵画、それが陳允陸の絵画の魅力となっているのである。

最後に、中国の自然（雪月花）を謳った著名な、詩人にして政治家の詞を挙げて、本論の結びの言葉としたい<sup>10)</sup>。

北国の風光  
 千里 氷 封とざし  
 万里 雪 飄ひるがえる  
 長城の内外を望めば  
 惟ただもろもろ奔奔を余し  
 大河の上下  
 頓とみに滔滔を失う  
 山に 銀蛇 舞い  
 原に 蠟象 馳せ  
 天公と試みに高さを比べんと欲す  
 晴日を須まちて  
 紅装 素裏そかを看れば  
 分外に妖嬈ようぎょうたらん

江山 此くたきようの如く多嬌なれば  
 無数の英雄を引いて 競いて腰を折らしむ  
 惜しむらくは 秦皇 漢武

略<sup>や</sup>文采<sup>おと</sup>に輸<sup>り</sup>  
唐宗 宋祖  
稍<sup>や</sup>風騷<sup>ぬず</sup>に遜<sup>る</sup>

一代の天驕  
成吉思汗  
只<sup>ひ</sup>だ弓<sup>ひ</sup>を彎<sup>おおわし</sup>きて大雕<sup>おおわし</sup>を射<sup>る</sup>を識<sup>る</sup>のみ  
俱<sup>とも</sup>に往<sup>けり</sup>  
風流<sup>ふうりゅう</sup>の人物<sup>にんぶつ</sup>を数<sup>かず</sup>えんには  
還<sup>な</sup>お今<sup>こんちよう</sup>朝<sup>あさ</sup>を看<sup>よ</sup>

### 資料

(図版、作家の言葉) 凡例：作品番号、題名、制作年、材質、寸法(縦×横cm)の順に表記し、作家による作品解説を採録した。なお、作品番号①は図版番号①を示す。材質で顔彩、顔料はそれぞれ日本、中国の絵の具を指す。写真提供：陳允陸

①「海霞」1986年 紙、墨、顔彩 60.0×70.0

中国水墨画の工筆画(細密画)の技法で、漁村の人々(女性)を描いた作品。赤い色で、海、舟、霧と人物と一体になって、自然と共存、自然と戦う女性の美しさを表現した。

②「琵琶行」1987年 紙、墨、顔彩 60.0×70.0

この作品は中国水墨画の工筆画の技法で描いた。唐代詩人白樂天の詩「琵琶行」をモチーフにした作品。詩の内容から人物を中心にして、背景にものを描かずに琵琶を弾いている女性の姿と舟、そして琵琶の音の響き。“詩中有画、画中有詩”をこの絵画に表現した。

③「山谷」1999年 麻紙、墨、岩絵の具、顔彩 120.0×90.0

山の中の岩をモチーフにした作品。中国水墨画の線の表現で岩肌の部分を描写し、日本画の画面の処理手法を取り入れ、現代的な水墨画を試みた作品である。

④「秋夜静泊」1999年 麻紙、墨、顔彩 60.0×50.0

月光の下にある風景。大胆な構成で、夜の月を強調し、淡青色で画面の全体を統一し、調和した作品である。時を忘れ、この絵の中の舟の上で、ゆっくりお酒を飲みたいものだ。

⑤「涛」2000年 麻紙、墨、顔料 53.0×45.5

日本海をイメージして、涛の迫力と響き、いわゆる「画外之音」を墨で構成した作品。

⑥「深山雨後」1996年 紙、墨、顔料 65.5×53

山の中、流れる泉水と鳥たち。自然のやすらぎを描いた。

⑦「晨」1997年 紙、墨、顔料 60.0×70.0

この作品は、描く前に紙のしわを作り出した後、そのしわを利用して、岩と山の形を描いた。朦朧の世界を淡い色で表現した。日本画の影響を受けた作品。日本人の自然感と美意識の中にある抒情性を取り入れて描いた。

⑧「山泉」1999年 和紙、墨、顔料 53.0×45.5

従来の山水画と違って、特別に構成したもので、水墨画の中に光を取り入れ表現した。

⑨「暮」1995年 和紙、墨 60.0×50.0

潑墨の手法で、和紙の滲みを利用して、墨の濃淡による墨の色と紙の白との対比の不思議な世界を描いた。

⑩「秋韻」2000年 和紙、墨、顔彩 60.0×50.0

日本の風景を中国水墨画の技法で描いた作品。奈良へ旅行した時に見た景色で、逆光の秋の樹の枝の中からもれる光を洋画の表現方法で描いた。

⑪「冬の朝」1999年 和紙、墨、顔料 60.0×50.0

冬の景色。雪の美しさを描いた作品。

⑫「春聲」2000年 和紙、墨、顔料 45.5×53

竹林の中、春の朝、明るくなる瞬間、静けさの中から小鳥の鳴き声が響きわたる。自然の生命を表現した。「画外之音」を描いた作品。

⑬「秋潤」2000年 和紙、墨、顔料 53.0×45.5

この作品は、雨の後、秋の山の潤いを描いたもので、伝統的な構図で、新しい描法を用いた。小さい画面に雄大な空間を表現し、秋の山を染める黄色で強調し、遠山の上に白い雲と光とを絵の中心に置き、見る者が画面の中に吸い込まれるような空間を作り出そうとした。

⑭「雨後山青」 2000年 和紙、墨、顔料 53.0×45.5

この作品は、画面全体を青い色で描き、近景の黄色の樹と対比し、従来のも水墨画とは違った山水画の構図を用いた。

山を描くことより空間を描くことに腐心し、山の清浄な気があふれるような画面に仕上げた。

註および参考文献

- 1) 『美術史を愉しむ—多彩な視点—』関西学院大学美学研究室編、塩田昌弘執筆「現代中国絵画事情—南京、北京の現代作家資料集成」P.107～P.108、思文閣出版、1996年5月
- 2) 『現代中国の俊英画家 陳允陸墨彩画 自然の詩』(図録)、陳允陸画歴P.14、神戸そごう百貨店プチ・ギャラリー、2000年10月
- 3) 『中国古典新書 画論』古原宏伸著、郭熙「山水訓」P.101～P.112、明德出版社、1995年8月  
 學、畫、花者以、一、株、花、置、溪、坑、中、臨、其、上、而、觀、之、則、花、之、四、面、得、矣、學、畫、竹、者、取、一、枝、竹、因、月、夜、照、其、影、於、素、壁、之、上、則、竹、之、真、形、出、矣、學、畫、山、水、者、向、以、異、比、蓋、身、即、山、川、而、取、之、則、山、水、之、真、度、見、矣、  
 春、山、烟、雲、薄、婦、人、欣、欣、夏、山、嘉、木、繁、陰、人、坦、坦、秋、山、明、淨、搖、落、人、蕭、蕭、冬、山、昏、黯、翳、塞、人、寂、寂、看、此、畫、令、人、生、此、真、如、真、在、此、山、中、此、畫、之、真、外、真、也、見、青、烟、白、道、而、思、行、見、平、川、落、照、而、思、望、見、幽、人、山、客、而、思、居、見、巖、扃、泉、石、而、思、遊、看、此、畫、令、人、起、此、心、如、將、真、即、其、處、此、畫、之、真、外、妙、也、
- 4) 『畫論』村上華岳著、「東洋畫の線」P.286～P.292 (昭和十年東京に於て口述)、中央公論美術出版、1962年5月  
 『日本の美術』河北倫明著、「現代における書画の交錯」、P.277～P.284、ペリかん社、1982年7月
- 5) 『宋元水墨画様式の日本化—雪舟の山水画をめぐる—』陳允陸執筆、P.1～P.121、関西学院大学大学院文学研究科修士論文、1994年1月
- 6) 『雪舟等揚論—その人間像と作品—』蓮実重康著、「墨画における日本的なるものの完成「天之橋立図」」P.156～P.162、筑摩書房、1961年2月
- 7) 『芭蕉文集 日本古典文學体系46』杉浦正一郎・宮本三郎・荻野清校注、「笈の小文」P.52、岩波書店、1977年5月
- 8) 『日本美術の特質』矢代幸雄著、「風景画の情感」P.687～P.693、岩波書店、1984年5月  
 『雪月花の近代』加藤一雄著、京都新聞社、1992年10月  
 『雪月花の時』山本健吉著、P.8～P.14、角川書店、1988年6月



『美しい日本の私』川端康成著・サイデンステッカー訳、P.10～P.12、講談社、1969年6月

- 9) 『白楽天 鑑賞中国の古典第18巻』西村富美子執筆、「殷協律に寄す」P.302～P.305、角川書店、1988年10月

五歲優遊同過日  
一朝消散似浮雲、  
琴詩酒伴皆拋我  
雪山花時最憶君  
幾度聽鷓鴣歌白日、  
亦曾騎馬詠紅裙、  
吳娘暮雨蕭蕭曲  
自別江南更不聞

- 10) 『漢詩一口一首 秋・冬』一海知義著、毛沢東「江山多嬌」P.680～P.684、平凡社、1994年2月

北國風光  
千里冰封  
万里雪飄  
望長城內外  
惟余莽莽  
大河上下  
頓失滔滔  
山舞銀蛇  
原馳蠖象  
欲與天公試比高  
須晴日  
看紅裝素裹  
分外妖嬈  
  
江山如此多嬌  
引無數英雄競折腰  
惜秦皇漢武  
略輸文采  
唐宗宋祖  
稍遜風騷  
一代天驕  
成吉思汗  
只識彎弓射大雕  
俱往矣  
數風流人物  
還看今朝

『毛沢東とその詩と人生～』武田泰淳・竹内実共著、「沁園春《第二十首》雪 一九三六年二月」、P.215～P.221、文藝春秋、1971年7月



①「海霞」1986年 紙、墨、顔彩 60.0×70.0



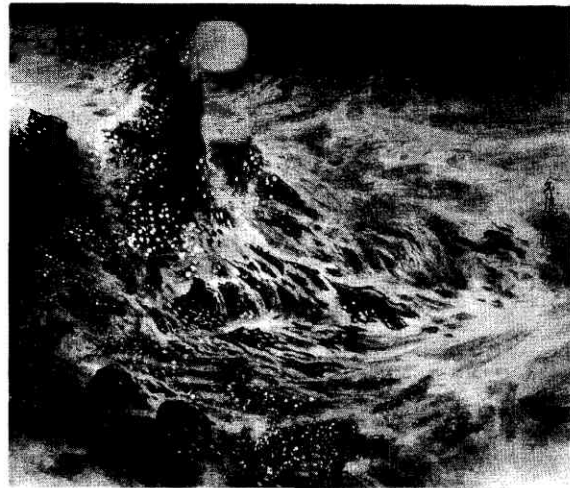
②「琵琶行」1987年 紙、墨、顔彩 60.0×70.0



③「山谷」1999年 麻紙、墨、岩絵の具、顔彩  
120.0×90.0



④「秋夜静泊」1999年 麻紙、墨、顔彩 60.0×50.0



⑤「涛」2000年 麻紙、墨、顔料 53.0×45.5



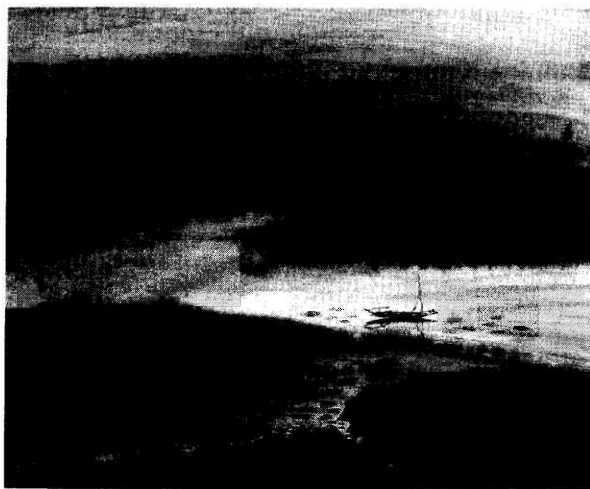
⑥「深山雨後」1996年 紙、墨、顔料 65.5×53



⑦「晨」1997年 紙、墨、顔料 60.0×70.0



⑧「山泉」1999年 和紙、墨、顔料 53.0×45.5



⑨「暮」1995年 和紙、墨 60.0×50.0



⑩「秋韻」2000年 和紙、墨、顔彩 60.0×50.0



⑪「冬の朝」1999年 和紙、墨、顔料 60.0×50.0



⑫「春聲」2000年 和紙、墨、顔料 45.5×53



⑬「秋潤」2000年 和紙、墨、顔料 53.0×45.5



⑭「雨後山靑」 2000年 和紙、墨、顔料 53.0×45.5



陳允陸 家族と共に（1999年11月 個展会場にて）